

第四次長野市スポーツ推進計画策定にかかる 市民アンケート調査結果 【概要版】

資料3

■調査の目的

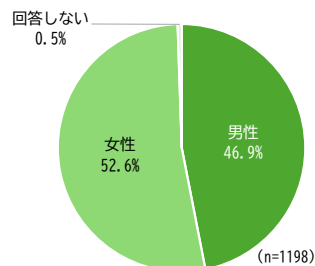
- ①市民のスポーツの実施状況を把握すること（「する」スポーツ、「支える」スポーツ、「観る」スポーツ、「障害者」スポーツ）
※スポーツ基本法改正によりスポーツの社会的役割として「集まる・つながる」が新たに明記されたことを受け、その視点での分析も追加
- ②現行計画の施策の見直しの視点を導出すること
- ③次期計画の指標候補の現状値を取得すること

■調査概要

調査対象：長野市内に在住の18歳以上の男女 3,000人
標本抽出：住民基本台帳（令和7年12月1日）からの無作為抽出
調査手法：郵送・Webフォーム回答の併用
調査期間：令和8年1月～2月
回収結果：1,211件（有効回答率40.4%）

■回答者属性

図表1-1 性別



図表1-2 年代



図表1-3 居住地区



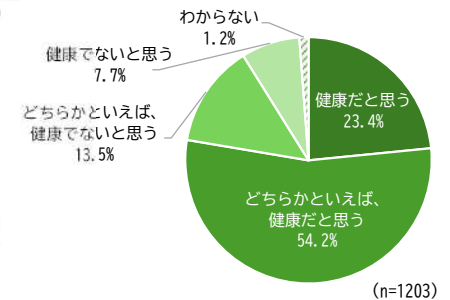
図表1-4 職業



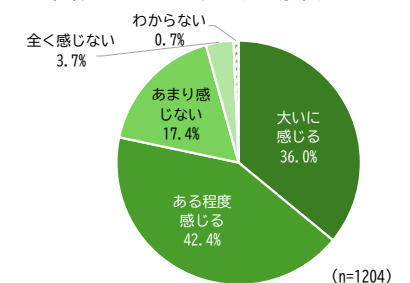
図表1-5 趣味や自分の楽しみに使える時間
(1日あたり) 平均

		平均値
性別	男性	126.3
	女性	119.0
年代別	10歳代	159.2
	20歳代	109.6
	30歳代	108.0
	40歳代	89.3
	50歳代	99.6
	60歳代	131.8
	70歳代以上	168.4
	全体平均	122.6
年代別	勤め人	91.0
	会社役員・団体職員	94.8
	パート・アルバイト	112.5
	自営業・農業（家族従業含む）	129.1
	専業主婦（夫）	158.5
	学生	140.3
	無職	197.4
	その他	95.4
	全体平均	122.6

図表1-6 主観的健康状態



図表1-7 主観的運動不足感



・働く世代、勤め人の可処分時間が全体平均より少ない

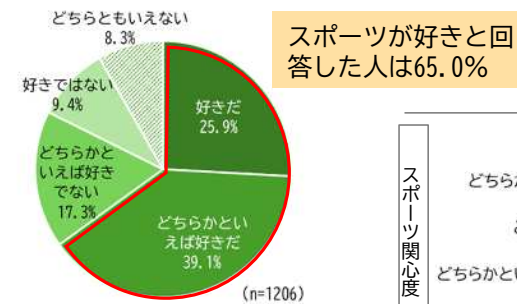
・健康だと感じている人が77.6%いる一方、運動不足と感じている人が8割近くを占める

1. 長野市民における「する」スポーツの現状

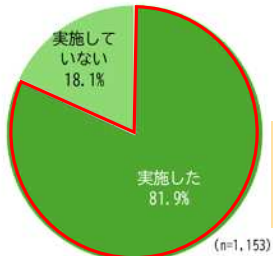
市民のスポーツへの関心は高いが、習慣化するには課題がみられる

- 運動・スポーツが「好き」「どちらかといえば好き」と回答した人は65.0%、また、この1年で何かの運動・スポーツを実施した人は8割を超える。しかし、「好き」と回答している高関心層の36.5%、「どちらかといえば好き」の57%が「スポーツ習慣がない」と回答しており、スポーツは好きだが、習慣化にはいたっていない人が多いと考えられる。特に働き世代や子育て世代を中心に、運動を継続的に実施するための時間や機会の確保が課題となっていることがうかがえる。
- また、施設が身近にあってもスポーツ実施につながっていない地域もみられ、地域特性や利用実態を踏まえたスポーツ環境づくりが求められる。

図表2-1 運動・スポーツへの関心度



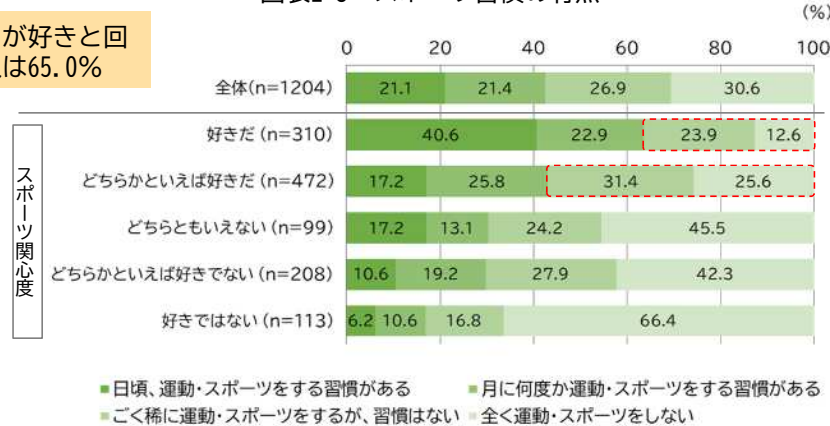
図表2-2 運動・スポーツを実施した人の割合



スポーツが好きと回答した人は65.0%

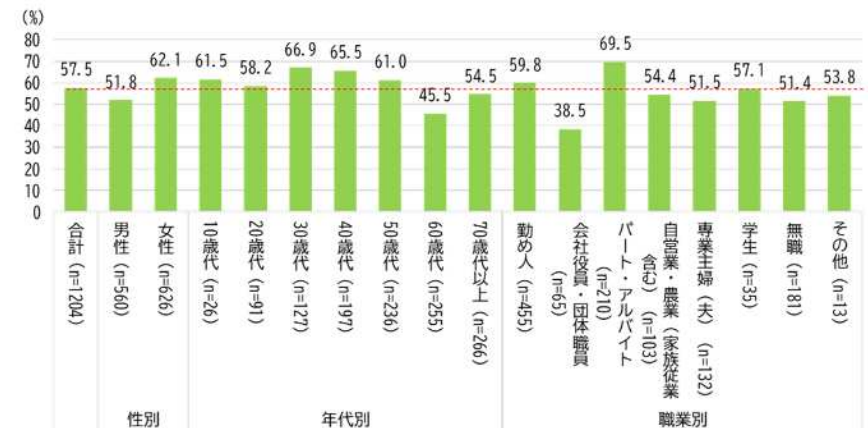
この1年で運動・スポーツを実施した人は8割を超える

図表2-3 スポーツ習慣の有無



- ・スポーツ習慣のある人は市民全体の42.5%。習慣のない人が57.5%と過半数を占める
- ・スポーツ関心度別にスポーツ習慣の有無をみると、「好き」と回答した人の36.5%、「どちらかといえば好き」の57.0%がスポーツする習慣がない
- ・スポーツ習慣がない人の割合を属性別に比較すると、女性、30～40歳代、パート・アルバイト

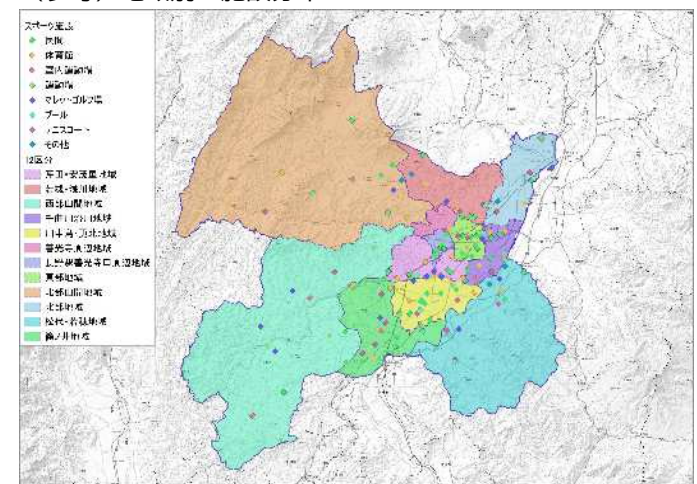
図表2-4 運動・スポーツの習慣がない人の割合（層別比較）



図表2-5 地域別 スポーツ習慣の有無とスポーツ施設数

	スポーツ習慣がある・計	日頃、運動・スポーツをする習慣がある	月に何回か運動・スポーツをする習慣がある	ごく稀に運動・スポーツをするが、習慣はない	全く運動・スポーツをしない	スポーツ施設数
川中島・更北地域 (n=157)	52.2	25.5	26.8	20.4	27.4	24
芹田・安茂里地域 (n=154)	48.7	27.9	20.8	22.1	29.2	14
松代・若穂地域 (n=148)	45.3	20.3	25.0	28.4	26.4	16
若槻・浅川地域 (n=69)	44.9	18.8	26.1	29.0	26.1	13
千曲川沿川地域 (n=104)	42.3	22.1	20.2	26.9	30.8	12
善光寺周辺地域 (n=57)	40.4	17.5	22.8	31.6	28.1	1
東部地域 (n=172)	39.0	20.9	18.0	29.1	32.0	20
西部山間地域 (n=44)	38.6	15.9	22.7	31.8	29.5	19
長野駅善光寺周辺地域 (n=55)	38.2	18.2	20.0	29.1	32.7	7
篠ノ井地域 (n=137)	37.2	16.1	21.2	29.2	33.6	22
北部山間地域 (n=16)	31.3	25.0	6.3	31.3	37.5	15
北部地域 (n=80)	30.0	16.3	13.8	28.8	41.3	12
合計	42.5	21.1	21.4	26.9	30.6	175

(参考) 地域別の施設分布



- ・スポーツ習慣率は川中島・更北地区が52.2%で最も高いのに対し、北部地域や北部山間地域は30%程度と低く、地域差がみられる
- ・地域内に施設があってもスポーツ習慣に結びつかなかったり、十分に施設が活用されていない可能性がある

1. 長野市民における「する」スポーツの現状

健康づくりを目的としたスポーツが中心。仲間や家族と「集まる・つながる」ニーズもみられる

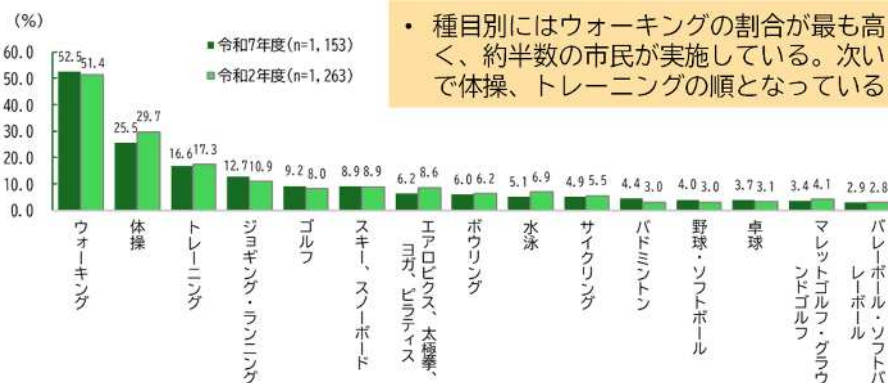
- この1年間に運動・スポーツを実施した市民は81.9%で前回よりも増加している。種目別には「ウォーキング」が最も多く、手軽にできる体操やトレーニングなども上位となっている。市民のスポーツ活動は、競技性の高いスポーツよりも、健康維持や体力づくりを目的とした活動が中心となっており、スポーツ振興においても健康づくりの視点が重要といえる。
- 友人や家族の勧めがスポーツを始めるきっかけになったり、仲間や家族との交流がスポーツをする理由になっている人が多くみられる。

図表3-1 この1年間に運動・スポーツした人の割合【前回調査との比較】



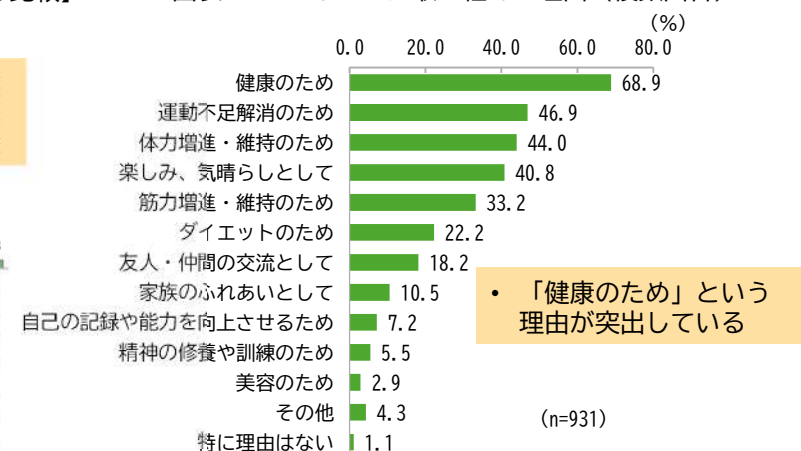
- この1年間に何かしらの運動・スポーツを実施した人の割合は5.4ポイント増加

図表3-2 実施した運動・スポーツ種目（複数回答）上位15位【前回調査との比較】



- 種目別にはウォーキングの割合が最も高く、約半数の市民が実施している。次いで体操、トレーニングの順となっている

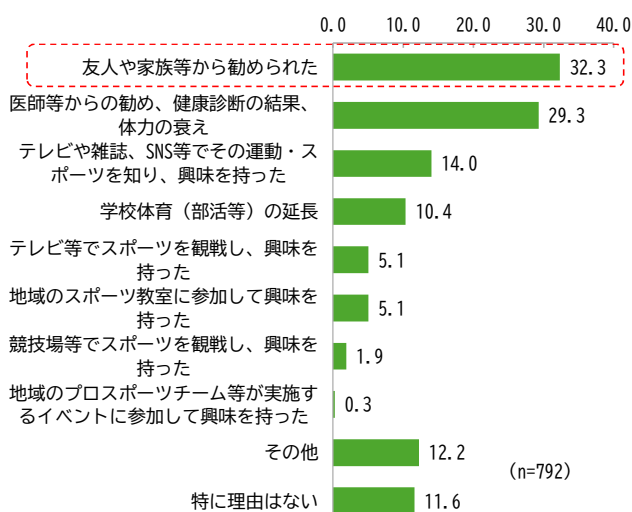
図表3-3 スポーツに取り組んだ理由（複数回答）



- 「健康のため」という理由が突出している

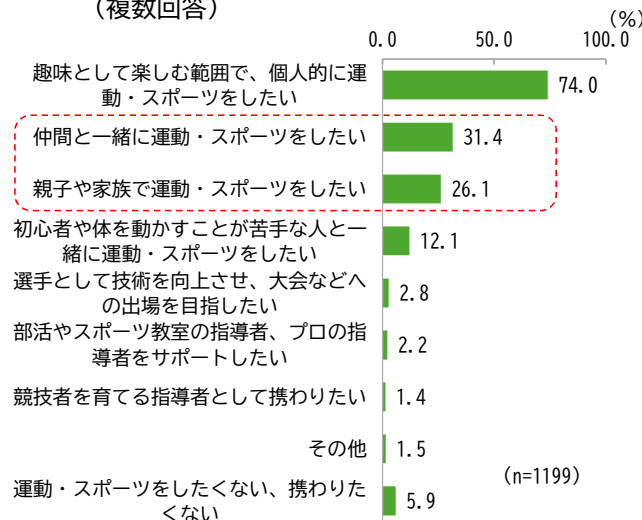
(n=931)

図表3-4 スポーツを始めたきっかけ（複数回答）



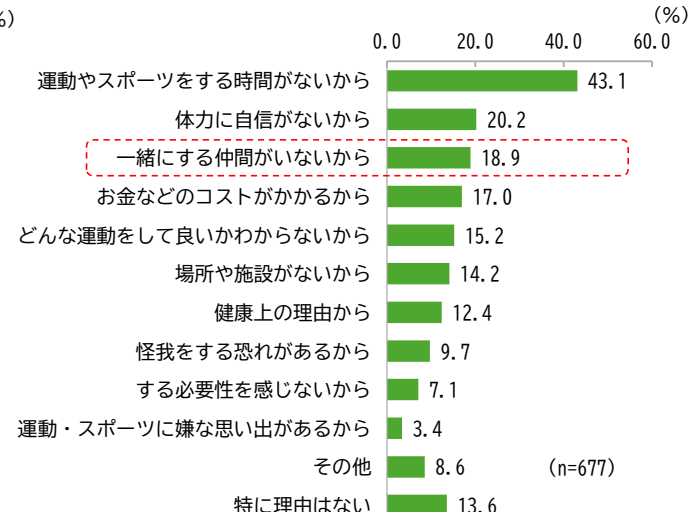
- 友人や家族からの勧めが始めるきっかけになっている人が最も多い

図表3-5 どのような形でスポーツをしたいか・携わりたいか（複数回答）



- 趣味の範囲で楽しむが74%で突出しているが、仲間や家族との交流を重視する人も少なくない

図表3-6 スポーツしない理由（複数回答）



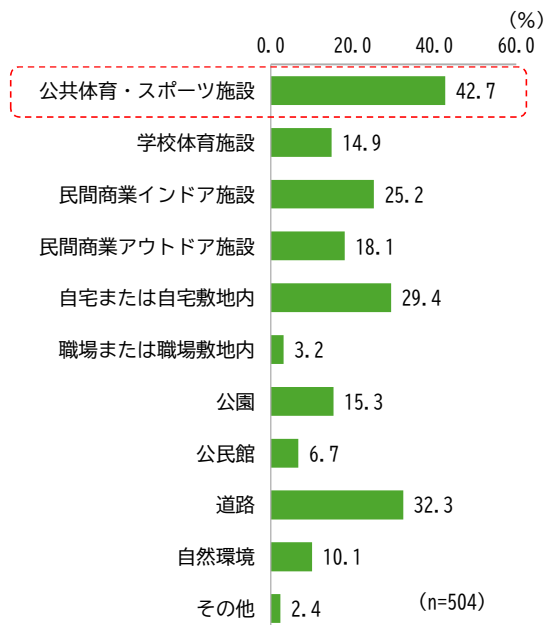
- スポーツしない理由は「時間がない」が最も多いが、「仲間がいない」ことも上位にあげられている

1. 長野市民における「する」スポーツの現状

公共スポーツ施設の利用は増加しているが、さらに利用促進の余地がある

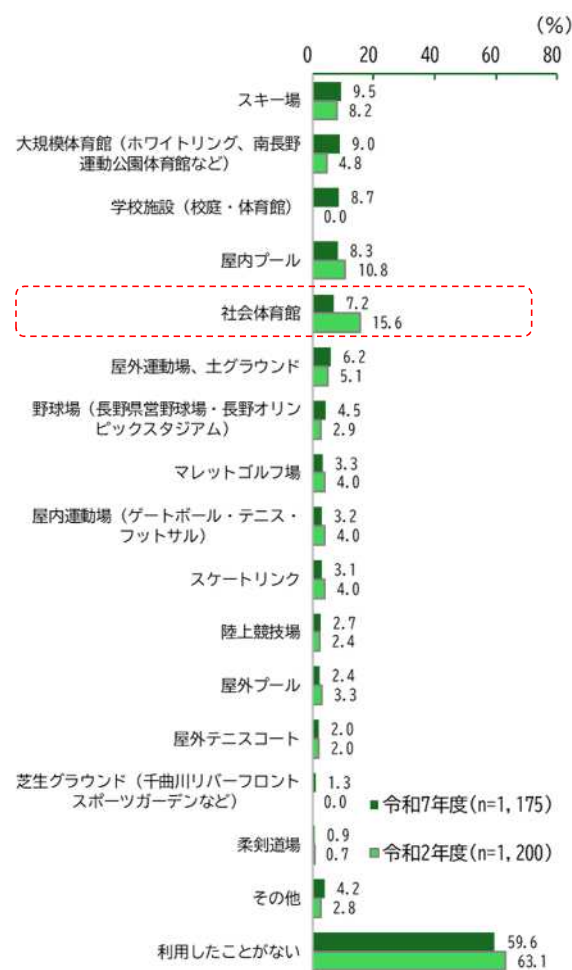
- 運動・スポーツを実施する場所は、「公共体育・スポーツ施設」が42.7%で最も多く、前回調査と比較して公共施設の利用割合は増加している。ただし、社会体育館の利用は低調となっている。
- 一方で、施設を利用しない理由として「施設をよく知らない」「一緒にやる仲間がいない」といった回答もみられ、施設整備に加え、情報発信の強化や、仲間づくり・交流といった視点からの利用促進の取組が必要と考えられる。

図表4-1 運動・スポーツを主に実施する場所（複数回答）
※運動・スポーツ習慣のある人のみ



- 42.7%の市民が「公共体育・スポーツ施設」で実施している

図表4-2 この1年間に利用した公共スポーツ施設（複数回答）【前回調査との比較】



- この1年間に公共スポーツ施設を利用した人の割合は前回調査よりやや増えている
- 社会体育館の利用者割合が前回調査の半分に減少している

図表4-3 公共スポーツ施設を利用したことがない理由（複数回答） ※利用したことがない人のみ



- 公共・スポーツ施設を利用したことがない理由は「運動・スポーツをしない」が最も多くあげられているが、それ以外では「一緒にする仲間がいない」が最も多く23.9%を占める

2. 長野市民におけるスポーツを「支える」活動の現状

スポーツを支える活動への参加はきわめて限定的。支える人材や活動機会を増やすことも課題

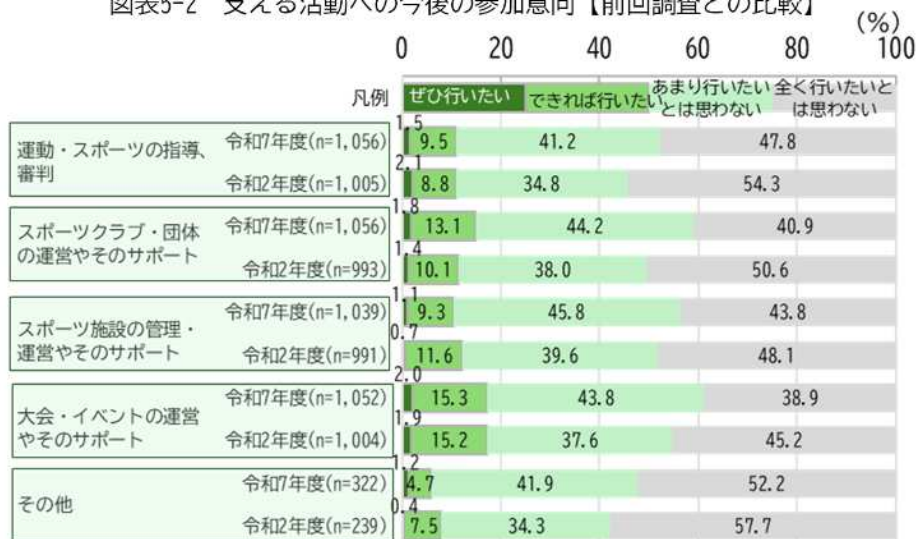
- スポーツ指導・審判、スポーツクラブ等の運営、大会運営などのスポーツボランティアを行っている人はいずれも1割未満となっている。今後の参加意向も全体的に低く、前回調査と傾向は変わっていない。
- 支える活動を行うために必要なこととして、日時が合うこと、頻度を選ぶこと、家から近いことなどの活動しやすさが上位にあげられている。
- スポーツを振興していくためには、競技者や参加者だけでなく、スポーツを支える人材の育成や参加機会の充実も課題といえる。

図表5-1 支える活動のこの1年間の実施状況【前回調査との比較】



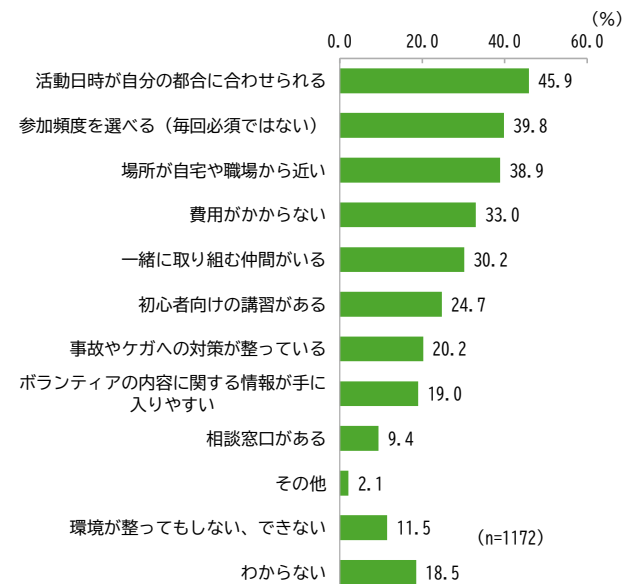
- ・ いずれの活動も行った人は1割を下回り、前回調査と変わっていない

図表5-2 支える活動への今後の参加意向【前回調査との比較】



- ・ 今後の活動への参加意向も低調であり、前回調査と変わっていない
- ・ 「できれば行いたい」まで含めると「大会・イベントの運営サポート」が2割近くとなっている

図表5-3 支える活動を行う上で必要なこと（複数回答）



- ・ 日時や頻度、距離など参加しやすさを求める声が上位となっている

3. 長野市民における「観る」スポーツの現状

スポーツ観戦は「する」スポーツとの好循環を生む可能性がある。プロチームとの連携も期待されている

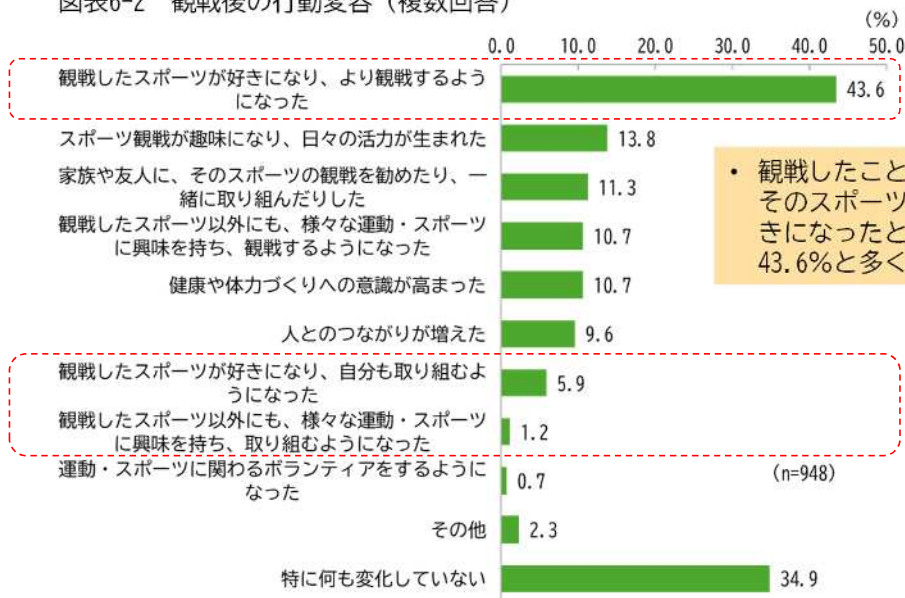
- この1年でスポーツ観戦した市民は8割近くに達する。観戦したスポーツは野球、マラソン・駅伝、サッカーが上位となっている。また、スポーツ習慣のある人ほどスポーツ観戦も活発に行っており、「するスポーツ」と「観るスポーツ」の好循環を生み出せる可能性がある。
- 観戦による効果として「そのスポーツが好きになり、より観戦するようになった」が43.6%と最も高くなっている。
- プロスポーツチームの活躍により地域への愛着が高まるという人が6割を超えており、プロスポーツチームとの連携による地域づくりへの期待がみられる。

図表6-1 スポーツ習慣の有無別 1年間に観戦したスポーツ（複数回答）【上位7種目】

	野球	マラソン・駅伝	サッカー	バレーボール	バスケットボール	フィギュアスケート	武道（柔道・剣道・空手道・弓道・相撲など）	観戦しなかった
日頃、運動・スポーツをする習慣がある（n=243）	50.2	49.0	27.2	23.5	22.6	15.6	17.3	16.9
月に何度か運動・スポーツをする習慣がある（n=252）	51.2	48.0	35.3	24.6	20.6	18.3	18.7	15.9
ごく稀に運動・スポーツをするが、習慣はない（n=313）	45.4	37.4	31.9	28.1	24.9	19.2	15.0	22.7
全く運動・スポーツをしない（n=347）	34.9	34.0	23.1	21.9	17.6	13.0	11.8	30.8
合計	44.5	41.0	28.9	24.5	21.3	16.5	15.3	22.5

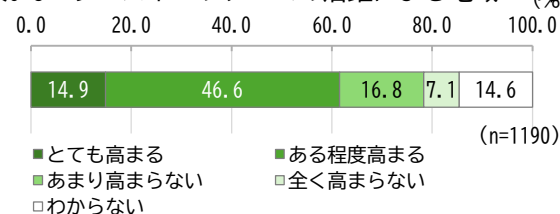
- ・ この1年間に観戦したスポーツは、野球、マラソン・駅伝が多く、4割を超えている
- ・ スポーツ習慣の有無別にみると、習慣がない人ほど「観戦しなかった」の割合が高くなっており、スポーツ実施とスポーツ観戦は関わりがあると考えられる

図表6-2 観戦後の行動変容（複数回答）



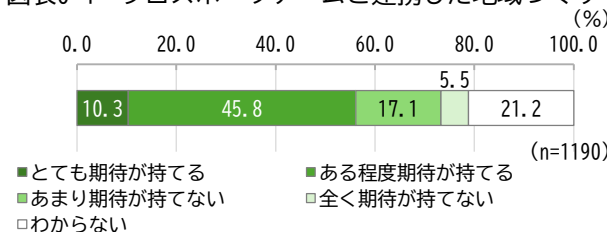
- ・ 観戦したことにより、そのスポーツがより好きになったという人が43.6%と多くみられる

図表6-3 プロスポーツチームの活躍による地域への誇りや愛着の高まり



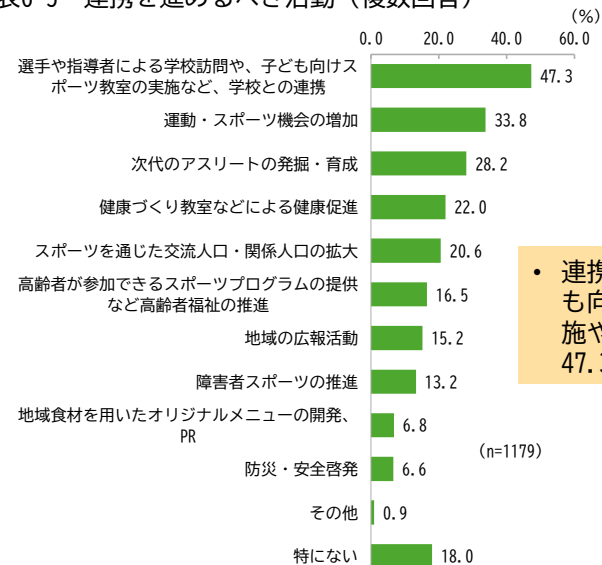
- ・ プロスポーツの活躍により地域への誇りや愛着が高まるという人が6割超

図表6-4 プロスポーツチームと連携した地域づくりへの期待



- ・ プロスポーツとの連携による地域づくりに期待している人は56%

図表6-5 連携を進めるべき活動（複数回答）



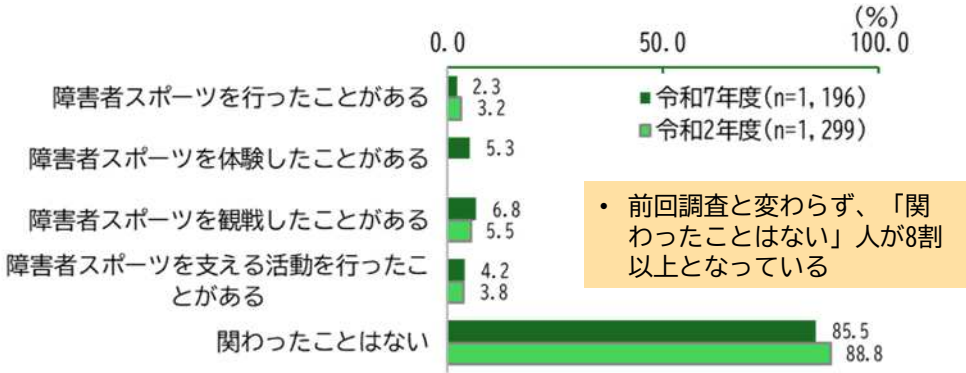
- ・ 連携すべき活動は「子ども向けスポーツ教室の実施や学校との連携」が47.3%で最も高い

4. 長野市民における「障害者」スポーツの現状

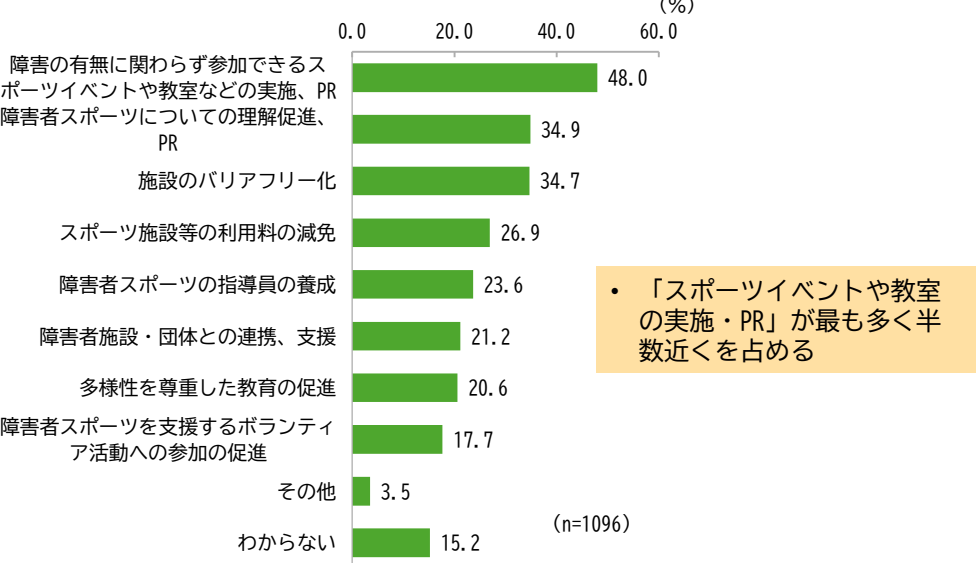
障害者スポーツの推進に向けて、理解促進と参加機会の充実が求められている

- 障害者スポーツに関与している人は少なく、前回調査から進展がみられない。誰もがスポーツに参加しやすい環境づくりとして「障害の有無に関わらず参加できるイベントや教室の開催」「障害者スポーツへの理解促進」「施設のバリアフリー化」などへの要望が上位となっている。
- 若い年代で自分ができる取組をあげる割合が他の年代より高くなっており、若い層を中心に障害者スポーツへの関与を高めていける可能性がある。
- 「集まる・つながる」というスポーツの社会的価値の一側面といえるスポーツを通じた共生社会の実現に向けて、障害者スポーツの参加機会の充実と環境整備を進める必要がある。

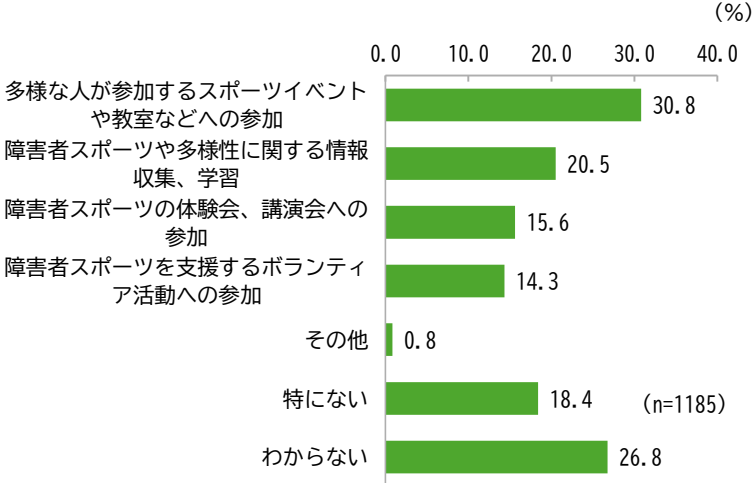
図表7-1 障害者スポーツの関わりの有無【前回調査との比較】



図表7-2 誰もがスポーツに参加しやすい環境をつくるために必要な取組



図表7-3 あなた自身ができる取組



【年代別】

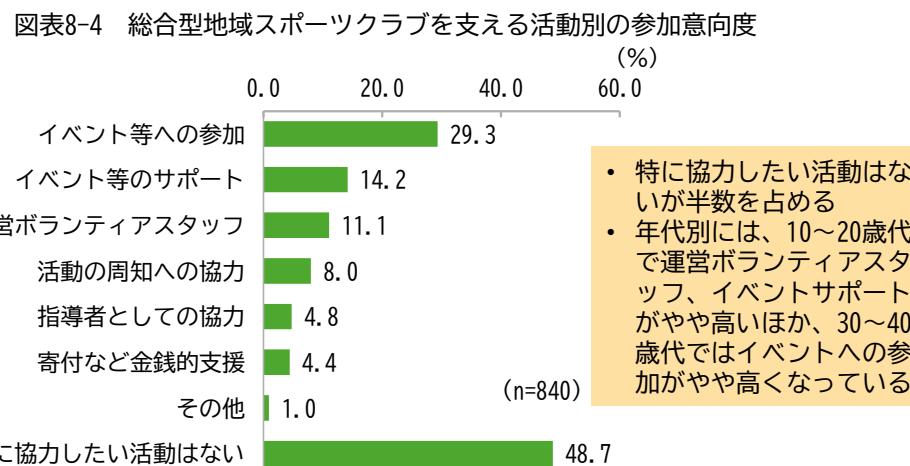
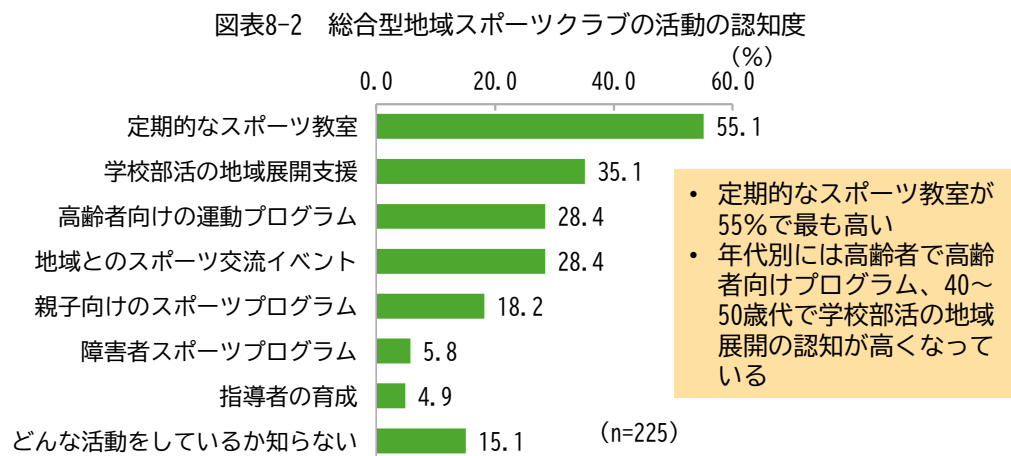
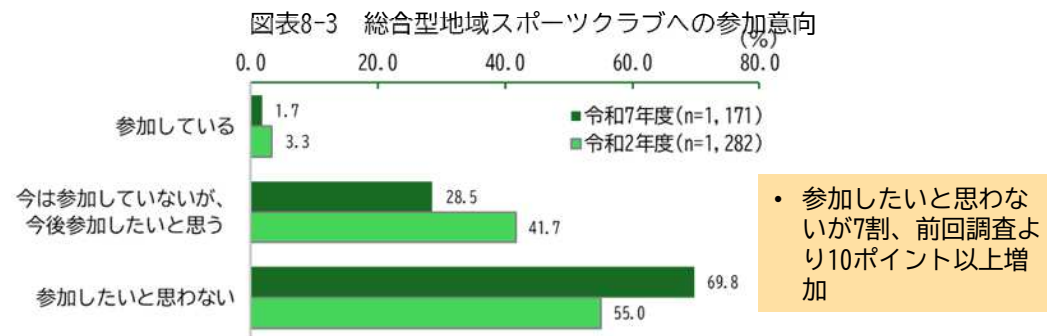
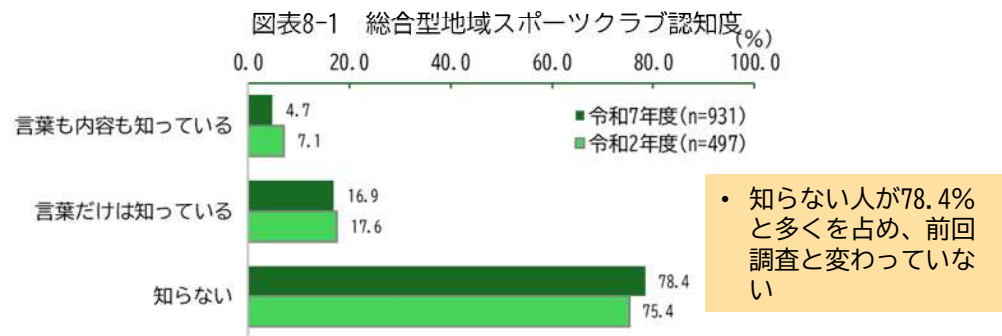
	多様な人が参加するスポーツイベントや教室などへの参加	障害者スポーツの体験会、講演会への参加	障害者スポーツを支援するボランティア活動への参加	障害者スポーツや多様性に関する情報収集、学習	その他	特にない	わからない
10歳代 (n=26)	26.9	23.1	23.1	15.4	0.0	15.4	30.8
20歳代 (n=92)	34.8	14.1	6.5	29.3	0.0	10.9	29.3
30歳代 (n=126)	30.2	11.9	11.1	29.4	1.6	17.5	24.6
40歳代 (n=194)	36.1	13.9	14.4	20.6	0.5	14.9	29.9
50歳代 (n=233)	32.6	20.2	19.3	21.9	1.7	12.9	24.9
60歳代 (n=254)	28.7	16.1	15.4	20.9	0.0	19.7	26.8
70歳代以上 (n=254)	26.0	13.4	11.8	12.2	1.2	28.0	26.4

- ・ 自身ができそうだと思う取組は、「多様な人が参加するスポーツイベントや教室などへの参加」が30.8%と最も高い
- ・ 年代別にみると、「特にない」の割合は年代が上がるほど高く、10歳代で「体験会講演会への参加」や「ボランティア活動に参加」できる人の割合が高くなって。また、20～30歳代で情報収集や学習に興味を示す人が多い

5. 「総合型地域スポーツクラブ」に関する現状

総合型地域スポーツクラブの認知・参加意向とも停滞。スポーツクラブの役割や存在意義の周知が課題

- 総合型地域スポーツクラブは約8割が「知らない」と回答し、前回調査から認知度が向上していない。
- スポーツクラブの活動としては「定期的なスポーツ教室」が最も知られている。その他、高齢者では「高齢者プログラム」、中学生の保護者の年代では「学校部活の地域展開支援」の認知が高まっており、当事者として関連する活動には関心が高いとみられる。
- スポーツクラブへの参加意向を示す人は28.5%にとどまり、「参加したいと思わない」が7割を占める。前回調査よりも意向度が低下している。
- スポーツクラブを支える活動ごとの参加意向度をみると、「協力したい活動はない」が約半数で関心が低い、若い年代で運営ボランティアやイベントのサポートへの関心がやや高くなっている。



【年代別】

	定期的なスポーツ教室	高齢者向けの運動プログラム	親子向けのスポーツプログラム	障害者スポーツプログラム	地域とのスポーツ交流イベント	指導者の育成	学校部活の地域展開支援	どんな活動をしているか知らない
10歳代 (n=3)	100.0	0.0	33.3	33.3	33.3	0.0	0.0	0.0
20歳代 (n=15)	46.7	6.7	13.3	6.7	33.3	0.0	46.7	13.3
30歳代 (n=18)	72.2	22.2	27.8	11.1	38.9	5.6	33.3	5.6
40歳代 (n=29)	65.5	27.6	31.0	6.9	34.5	0.0	55.2	6.9
50歳代 (n=61)	45.9	19.7	14.8	4.9	24.6	8.2	44.3	19.7
60歳代 (n=46)	56.5	30.4	10.9	6.5	21.7	6.5	28.3	17.4
70歳代以上 (n=50)	52.0	48.0	18.0	2.0	30.0	4.0	16.0	18.0

【年代別】

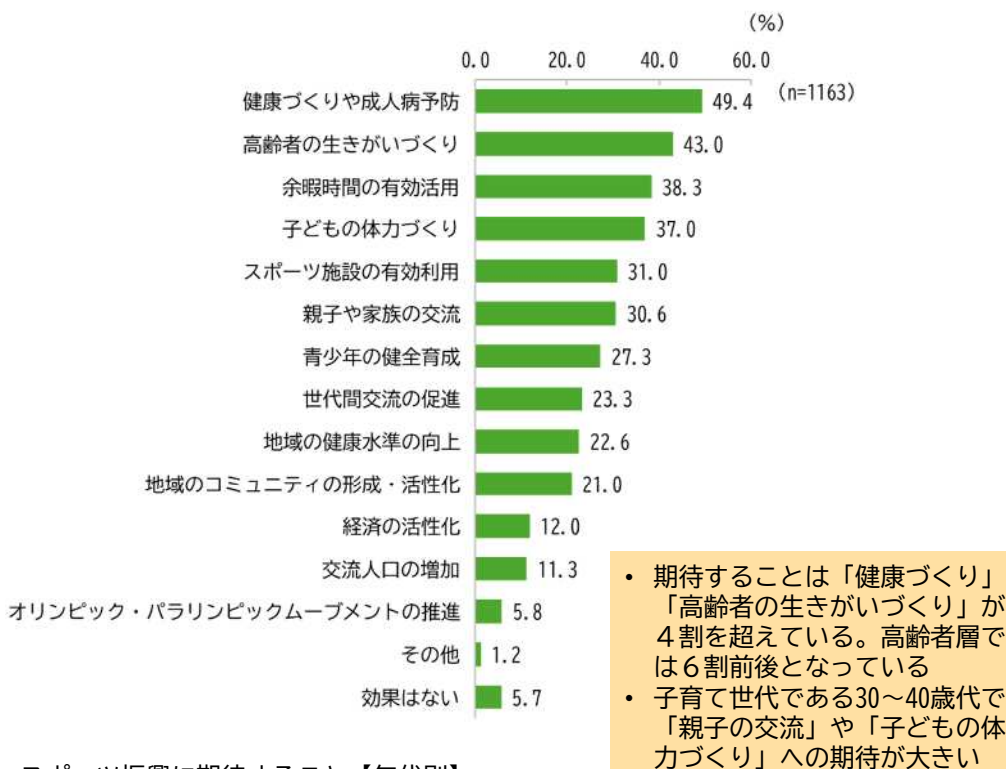
	運営ボランティアスタッフ	指導者としての協力	イベント等のサポート	寄付など金銭的支援	イベント等への参加	活動の周知への協力	その他	特に協力したい活動はない
10歳代 (n=20)	20.0	10.0	25.0	10.0	20.0	0.0	0.0	50.0
20歳代 (n=60)	21.7	6.7	28.3	5.0	31.7	8.3	0.0	31.7
30歳代 (n=70)	8.6	8.6	14.3	4.3	34.3	12.9	0.0	38.6
40歳代 (n=119)	13.4	6.7	16.8	2.5	42.0	8.4	1.7	31.1
50歳代 (n=167)	14.4	4.2	17.4	7.8	33.5	7.8	0.0	46.1
60歳代 (n=201)	11.4	4.0	12.4	4.0	28.4	7.0	1.0	49.8
70歳代以上 (n=197)	3.6	2.5	6.1	2.0	17.3	7.6	2.0	69.0

6. 市のスポーツ振興について

スポーツ振興に期待するのは健康づくり。今後行政に対して重視するのは施設整備と参加しやすい環境づくり

- スポーツ振興に期待する効果は「健康づくり・生活習慣病予防」「高齢者の生きがいづくり」が上位となっており、特に高齢者層でその割合が大きくなっている。また、30～40歳代の子育て世代では、「親子や家族の交流」「子どもの体力づくり」に期待する人が多い傾向がみられる。市民は、健康福祉や生涯学習、仲間づくり・交流、子育ての視点からスポーツの価値を重視していることがうかがえる。
- 今後、市に力を入れてほしい施策として、「スポーツ施設の充実」「スポーツイベント・教室の開催」「障害の有無に関わらずスポーツに親しめる環境づくり」が3割を超え上位にあげられている。スポーツ施設の充実に加え、誰もが気軽に参加できる機会や環境を整備し、市民のスポーツ実施率向上につなげていくことが重要である。

図表9-1 スポーツ振興に期待すること（複数回答）【前回調査との比較】



図表9-2 スポーツ振興に向けて最も力を入れるべきこと



スポーツ振興に期待すること【年代別】

	親子や家族の交流	余暇時間の有効活用	世代間交流の促進	子どもの体力づくり	青少年の健全育成	高齢者の生きがいづくり	健康づくりや成人病予防	経済の活性化	交流人口の増加	スポーツ施設の有効利用	地域の健康水準の向上	地域のコミュニティの形成・活性化	オリンピック・パラリンピックムーブメントの推進	その他	効果はない
10歳代 (n=26)	19.2	34.6	23.1	30.8	34.6	23.1	30.8	30.8	30.8	38.5	23.1	34.6	7.7	3.8	7.7
20歳代 (n=90)	36.7	38.9	15.6	33.3	20.0	24.4	36.7	8.9	11.1	25.6	16.7	17.8	4.4	1.1	13.3
30歳代 (n=124)	46.8	41.9	19.4	55.6	28.2	25.0	39.5	12.9	10.5	36.3	17.7	16.9	4.8	0.8	4.8
40歳代 (n=196)	48.5	35.7	19.4	49.0	26.5	25.5	37.8	11.7	9.7	27.0	17.9	16.3	4.1	0.5	9.7
50歳代 (n=231)	31.2	36.8	25.5	37.7	31.6	39.4	49.8	16.5	11.3	38.1	22.9	26.4	8.2	2.2	5.6
60歳代 (n=244)	19.3	39.3	23.0	29.5	27.0	57.8	59.0	9.4	7.0	28.7	25.0	19.7	7.0	1.2	2.5
70歳代以上 (n=246)	17.5	39.0	29.3	26.8	25.2	63.4	60.2	8.9	14.6	27.6	28.9	23.2	4.9	0.8	3.3

【まとめ】次期計画策定に向けた課題の整理

1. 市民アンケート結果からみる現状・課題と今後の方向性

現状・課題

「する」スポーツ	・スポーツに関心がある層が65.0%を占める一方、スポーツが習慣になっている人は42.5%とどまる。<u>スポーツが好きでも実施できていない層が存在する。</u> ・特に<u>女性や30～50代の現役世代・子育て世代において「可処分時間の不足」などが習慣化の大きなボトルネックとなっている</u>と考えられる。
「支える」スポーツ	・スポーツを支えるボランティアの参加率はごくわずかであり、今後の参加意向も極めて低調。参加するための条件として<u>「日時が合う」「頻度を選べる」「家から近い」など、参加しやすさが求められている。</u>
「観る」スポーツ	・スポーツ観戦をきっかけに「そのスポーツがより好きになった」という変化はみられるが、<u>自分でスポーツを「する・支える」までの行動変容にはつながっていない。</u> ・長野市のプロスポーツチームの活躍が「地域への愛着・誇り」に繋がっていると感じる市民は6割を超え、地域づくりにおける連携に期待する人も少なくない。
障害者スポーツ	・障害者スポーツに<u>「関わったことがない」市民が85.5%</u>でほとんどを占める。ただし、10～30代の若い世代において、ボランティアへの関心度や、体験会への参加意欲、学習意欲が他年代より高く出ている。
運動・スポーツの基盤	・総合型地域スポーツクラブの認知度、参加意向ともに低迷している。 ・公共スポーツ施設全体の利用率は前回調査より増えたものの、<u>社会体育館の利用率が減少</u>している。施設や利用方法などの<u>情報が公平に行き渡っていない可能性</u>がある。 ・<u>スポーツ習慣に地域差</u>があり、施設があっても活用されていない地域がある。 ・オリンピックレガシーを誇りに感じる市民が多い反面、若い世代はその実感が薄い。また、施設の活用不足や負の遺産になることへの懸念もみられる

今後の方向性

- スポーツ好きな人が習慣的にスポーツを実施できるようにするための支援の具体化
⇒例) 女性や忙しい世代が隙間時間や身近にできるプログラム・機会の提案
- スポーツボランティアの柔軟な仕組みの構築
⇒例) 興味のある人が短時間・低頻度・近隣でライフスタイルに合わせて参加できる
- 市内のプロスポーツチームの応援や連携による地域づくり活動を通して「する」スポーツ、「支える」活動への関心につながる仕掛けづくり
- 障害者スポーツを知る機会や接点の強化
⇒例) 関心の高い若い世代や学生層を対象に、ボッチャをはじめとする多様なユニバーサルスポーツの体験会や用具の貸出を実施
- 総合型地域スポーツクラブの市民にとっての役割と価値を再定義し理解促進・様々な関与の仕方を提案
- 社会体育館の幅広い層の利用を促すための情報発信の強化と公平性の担保
⇒例) 予約ルールの見直し、デジタルデバインド対応等
- 次世代につないでいくためのオリンピックレガシーの価値の再定義と施設活用の強化

2. スポーツ政策の潮流からみる長野市の現状・課題

国・県のスポーツ政策の動きを踏まえ、次期計画で対応すべき視点と長野市の現状・課題を整理します。

次期計画で対応すべき主な潮流	アンケートからみる長野市の現状・課題
●「個人の健康のためのスポーツ振興」から、「社会課題解決（コミュニティ・共生社会の創出、プロとの連携による経済の好循環）に寄与するスポーツ推進」への構造転換 [第4期スポーツ基本計画の方向性]	・市民がスポーツする理由や市のスポーツ振興に期待することは、個人の健康づくりや生きがいづくりがメインとなっている。一方、<u>障害者スポーツや地域スポーツクラブへ関心はまだきわめて低く、スポーツを通じた地域づくりや共生社会づくりへの関心・関与を強化していく必要がある。</u>
●スポーツの持つ「あつまる・つながる」社会的価値の創出 [スポーツ基本法改正]	・スポーツをする理由もしくはしない理由に「仲間」の存在をあげる市民は少なくない。 ・個人で行うだけでなく、<u>スタジアムやイベントなど特定の場所に「集まる・つながる」スポーツを通して、地域経済やコミュニティの活性化、孤立の解消などにつなげていくことが求められる。</u>
●スポーツホスピタリティの向上：多様な需要に応じたスポーツを楽しむ機会等の確保 [スポーツ基本法改正]	・市内のプロスポーツチームを応援する市民や様々なスポーツ観戦を楽しむ市民は多い。また、長野市はオリンピックレガシーを活かし、スポーツをする・観る機会・環境は充実している。 ・こうした強みを活かして、市内での<u>スポーツを「する」「観る」「支える」体験を高付加価値化し、ウェルビーイング（心身の幸福）の向上や観光振興・経済活性化につなげていく必要がある。</u>